

豊かで 伸びやかに そしてたくましく



スカウト みやぎ

No.32

発行
日本ボーイスカウト宮城県連盟

発行日
平成24年10月31日



オーナブルマイケルB-Pご夫妻ご来県

ボーイスカウト宮城県連盟 理事長 芳賀 文蔵

ボーイスカウトの創始者ロバート・ベーデン・パウエル卿の孫に当たるオーナブルマイケル・ベーデン・パウエル・ジョアンご夫妻が、東日本大震災で大被害を受けた宮城県にお見舞いと激励のため、8月10日お出でになりました。

ご夫妻は滋賀県で開催された、第11回日本アグーナリーに参加された後、荒尾雅也氏（世界スカウト財団理事・日本チャプター会長）のご案内により制服姿で仙台駅に到着。関係者が駅でお迎えました。

早速宮城県庁で、三浦副知事・高橋教育長と会見。その後西村生涯学習課長さんから、宮城県の被災・現在の復旧状況の説明（英文資料を準備）を受けた後、バスで仙台市・名取市・塩釜市の被災地を視察されました。

郷家副連盟長・芳賀理事長・千葉県コミッショナー等7名が終日同行しました。

被害甚大の名取市閑上山では津波で亡くなられた、スカウト・リーダーの霊に黙祷献花するとともに関係者を励まされました。

夕刻になりましたが、県連盟事務所前において、ご夫妻の歓迎式を開き郷家副連盟長・ガールスカウト代表の歓迎挨拶ののち、マイケル氏から暖かく力強い激励のお言葉（時間の都合で講演要旨は別冊にて配布）をいただき、さらに御来県の記念に植樹（房アカシア＝ミモザ）を行っていただきました。

引き続き二階特設会場に移動し、ご夫妻をかこみ、ティーパーティーに移りました。この間、一人一人と握手の上、オーストラリアから持参の、特製のカンガルーのバッチを自ら、各人の襟に刺して下さる等、心のこもる対応をしていただき、深く感銘を受け有難く感謝の気持ちで一杯であります。

マイケル ベーデン・パウエル (The Honorable Michael Baden-Powell) 氏

※ The Honorable は英国において侯爵 (Bath 勲位) 所有者への敬称

略歴

マイケル ベーデン・パウエル (英国人)

- ・ 1940 年 12 月 11 日 ロードシア (現ザンビア) 生まれ (71 歳)
- ・ 1949 年 (9 歳) イギリスに移住した。
- ・ 1969 年 (29 歳) オーストラリアに移住した。
- ・ 現在、オーストラリア メルボルン に在住。

〔家系の紹介〕

- ・ ボーイスカウトの創始者ロバート スティフェンソン スミス ベーデン・パウエル (1857 年生まれ) の直系の孫息子であり、近々ギルウエルの貴族を継承する。

〔現在のスカウト役務等の紹介〕

- ・ オーストラリア スカウト本部の コミッショナー (ビクトリア部門)
- ・ 世界スカウト財団 (カール 16 世グスタヴ・スウェーデン国王陛下が名誉総裁) メンバー
- ・ ガールガイド世界機構オーストラリア支部のメンバー
- ・ オーストラリア Guide Badge Club (ガールスカウト関係) の支援者

〔スカウト関係 主な受賞歴の紹介〕

- ・ オーストラリア スカウト本部から、「シルバー カンガルー」受章
(オーストラリア スカウト本部の高度な功労章)
- ・ マレーシアのスカウトとガールガイド連盟から、最高位の賞を受賞

オーナフルマイケルベーデン・パウエル氏講演テキスト (翻訳) 全文

2012 年 8 月 10 日

於：宮城県多賀城分庁舎

本日この場所での講演の意義は、私の祖父ベーデン・パウエル卿が 1912 年の 4 月に日本を訪問し、それを記念して孫の私がちょうど百年後に親善訪問を行ったということです。

この講演の中で触れる写真は 1957 年のイギリス、サットン・パークで行われた第 9 回世界ジャンボリーの期間に撮影されたものです。このジャンボリーは、私の祖父がブラウンシー島において今日世界スカウト運動として知られているものに発展する重要な実験キャンプを行ってから 50 年目を記念するものでした。

この機会に、写真を飾るきじ章のリボンを手に入れることを可能にしてくれた事務局長の木村さん、BP フェローの仲間である久野さんほかの皆様に感謝いたしたいと存じます。

この章は私の記憶が正しければボーイスカウト日本連盟の当時理事長であった久留島秀三郎氏から送られたものでした。私は非常に若いスカウトとしてこのジャンボリーに参加したので、この歴史的な写真が撮影された意義ある場所に居合わせ、それを目撃しました。これらが 55 年後の今となって、日本連盟の本部に飾られるのは意味深いものと思います。

BP がブラウンシー島で実験キャンプを行って後、スカウト運動は現在では例えばノーベル財団やユネスコなどの有力な組織にも認識されるほどの誇り高い歴史を築いてきました。1939 年に BP はノーベル平和賞受賞者にノミネートされましたが、世界に敵対関係が発生したためにその年の授賞は行われませんでした。

この運動の核心の要素は全てのスカウトやガールガイドが自分の名誉にかけておきてと誓いに示されている生活の規範を守ることです。その結果、この運動は社会の中で、特に経済と政府部門において世界中で高い社会的地位を得てきました。

これがどのようにして始められたかという状況を考えてみると、私はスカウト／ガイド運動が発足したことが自体が驚異だと考えています。事実、これらの運動を始めた人物は、その時すでに大多数の人たちは引退を考える年齢であり、その中で世界的な規模の運動を始めようとしたことが自体が驚くべきことです。

実際のところ、BPは50歳を少し過ぎ、独身で、世界各地で勤務したイギリス陸軍の上級将校でした。要するに彼と若者との接点は、単に若者を兵隊にするために訓練し、戦争のための準備として必要な技能を教えることでした。しかし、皮肉なことに、彼は世界最大の平和運動の創始者だと言われるまでになりました。BPは夢を持ち、それを他人に効果的に伝える能力をそなえていました。その結果、世界中の全く異なった背景を持つ何百万の人たちを熱中させることに成功しました。彼がしたことは「想像力を刺激すること」で、彼らはそれに従って行動したのです。

BPの哲学は単純でした。それは「世界の将来の繁栄と平和の維持は、肌の色や、階級や、生まれに関係なく、若い人々の手にゆだねられている」ということです。

このような一見不可能とも見える背景の下で、1907年8月1日にブラウンシー島でまかれた一粒の種はスカウト運動の生誕となり、今では世界中の216の国と地域で行われ、3800万人を越える加盟員を有するようになりました。スカウト／ガールガイド運動は単に世界最大の青少年活動というだけでなく、非常に現実的なものとしての最大の平和運動と言ってよいと思います。

これら二つの運動は世界の多くの変化に直面してきました。その中でそれらは異なる年齢や階層の無数の人たちの人生の形成に役立ってきました。各地を旅行して、私は多くのボーイやガールの関係者に会ってきましたが、彼らが必ず持っている共通の特性は「熱病のように伝染性を持ち、エネルギーにあふれた情熱であり、そして特にかれらが大切に守っている大事な思い出を分かち合いたいという純粋な暖かい気持ちです。おそらく皆に共通する唯一つのものは、このユニークなスカウト／ガイド活動に参加する機会を持ったことを誇りとする深い気持ちであろうと思います」。

基本的に、われわれの運動は常に若い人たちを助け彼らが有益で、満ち足りた、興味ある人生を送ることが出来るようにと考えられ、彼らが関心を持ち、考える力をつけ、そして何よりも人格形成に役立つような多種多様な活動を提供し、そしてそれらに参加を奨励することです。

われわれスカウト／ガイドの訓練プログラムは若者が社会において役立ち、有意義な人間になるように考えて作られており、それは言い換えれば責任感を持ち、活動的な社会の一員になるようにすることです。

BPは軍人として多くの勲章を授けられた人ですが、また戦争の無益さについても深く認識していました。彼の考え、それはその後の歴史によって正しいことが証明されていますが、それによると多くの場合において戦争は対話能力に欠け、他人を理解し、心を通わせる能力に欠けた人たちによって起こされているということです。つまり、このような「人々」は多分に自分勝手な利害関係にとらわれて他人の意見を尊重する能力が欠如しているからで、このようなことは現在でも世界各地で経験されていることです。BPの考えでは、大抵の若者は大人たちが持っている「くびき」から開放されているということでした。そして考えたことは、世界平和を実現する最も効率的な方法は若者を通じて行うということでした。BPは若者が定期的に集まることによって多くのことが達成されると信じていました。そしてわれわれの「ジャンボリー」の概念はこの考え方の有効性を証明する十分な証拠です。スカウト／ガイドで幸運にも国際行事に参加する機会を得た人たちは全ての国の全ての人から発せられる伝染性のある暖かい友情、理解、同志的連帯感を体験するでしょう。

ここで日本が2015年に第23回世界ジャンボリーのホスト国となっていることを申し上げなくてはなりません。われわれは皆大きな期待を持ってこれを待ち望んでおります。

今日でもスカウトとガイドは今までと同様にこの世界をより良い場所にする助けとなる活動を実践的な方法で実行し貢献しています。スカウトとガイドはユネスコや同様の機関で実施されているさまざまな地域開発プロジェクトに参加する機会を与えられています。多くの先進諸国の間では活発な「学生」交流プログラムが行われています。

これまでのところスカウトやガイドの活動は勝利をしてきました。しかし、今それだけで満足しているわけにはいきません。われわれは今後も視野を広くして見る必要があります。人類社会に対するわれわれの特別な立ち位置と約束事を考えると若者の発進に寄与することこそ最重要課題として残るでしょう。それは急速に変貌する世界の要請に応えられるように若者に必要な訓練と能力をあたえることです。それだからこそ、スカウトやガイドの指導者たちは常に訓練や開発のプログラムを修正してきています。

スカウト／ガイド運動に対するニーズはかつてないほど強くなっています。価値観や人生にたいする期待が変化するにともなって、われわれの訓練も若者の現時点の個人開発活動と一体化したものでなければなりません。

最後に許されるならば一つの考えを残させていただきたいと思います。「スカウトあるいはガイドとして、われわれはすでに信頼や友情の意味するところを知っており、またそれらの運動が体現する理想や原則を理解しています。あまりにも不確実性に満ちた生活の中で、「左手の握手」ほど与えられるものが多いものがあるでしょうか。



皆様の将来に良いキャンピングと幸福な人生がありますように。



第11回アグーナリーにオーストラリア派遣団の一員で参加された、ベーデン・パウエル卿の孫「マイケルご夫妻」が参加の後京都、東京により宮城県に来県いたしました。会場ではボーイスカウトの創始者ベーデン・パウエル卿のお孫さんとしてスカウトに歓迎され、どこに行ってもサインを求められ、最後にはサインを断る場面も見受けられました。

8月10日に来県仙台駅に県連役員の迎えを受けてご夫妻が到着され、県庁を訪問、震災の夫妻地を訪れ、県連事務所玄関前にバスで到着され、レセプションに参加の指導者が迎えました。ベーデン・パウエル卿の孫マイケルご夫妻をお迎えいたし、県連としての歴史的一場面と成りました。

ご夫妻は芳賀理事長の案内で事務所に入り休憩を取られた後、駐車場で歓迎のセレモニーが千葉県コミッショナーの進行で始められました。芳賀理事長、郷家副連盟長の歓迎の言葉に続いてガールスカウトのリーダーが流暢な英語で歓迎の言葉を述べられ、マイケル氏の挨拶がありました。塩釜のスカウトよりご夫妻に花束が贈られ、記念の植樹がご夫妻の手により行なわれました。植えられた木はオーストラリアの国木に近い木を堀越名誉会議議員に用意していただき、また植樹記念ボードを大久保理事が即急に準備し、事務所前の花壇に植えることが出来、出席された方々が記念の写真をマイケルご夫妻と一緒に撮ることが出来ました。

植樹の後二階会議室に大山職員を中心に用意されたレセプションの食べ物が並んでいるところに移り、1人ひとりマイケル氏よりオーストラリア土産のカンガールバッジや派遣団のパッチなどが手渡され和やかな雰囲気では催されました。あっという間に時間が過ぎ仙台を離れる時間がきてしまい、玄関前よりバスに乗り込むご夫妻を見送り無事に県連としての役割を終えることが出来ました。

(大久保 晃男 記)



インスパイア・ジャパン2012でスピーチ

仙台第35団ベンチャー隊 長田 直樹

東日本大震災から約1年半が経ちました。しかし、被災地の現状を見てみると未だに震災当時とほとんど変わらない場所もあり完全復興とかはまだ程遠い状況です。

震災当時、私は学校で普段通りに授業を受けていました。午後2時46分地震がやって来ました。学校の緊急地震速報が鳴り始め、轟音と共に私達を襲い数秒後、大きな横揺れが始まり、目の前には非日常的な光景が広がりました。机と椅子は激しく動き、窓の外を見てみると電柱や柱がしなっていてその向こうには火災現場が見え私は一瞬夢だと感じました。地震が収まると、お互いに健康状態を確認し、先生の指示で、陸上競技場に避難しました。不幸中の幸いだったのは学校にいた教職員と生徒が無事だったことです。避難してまもなくすると、段々と周辺の被災状況が分かって来ました。しかし、言葉だけで状況が淡々と語られても私は、たいして実感が湧きませんでした。でも仙台空港が津波に襲われている映像を見た時はさすがに身の危険を感じました。ふと空を見上げると空からは雪が降ってきて、私は空が泣いている様に感じました。その日の夜は、恐怖や寒さなどが私達を襲い情緒不安定になっている友人もいました。私の通っている学校は教職員も含めると2000人近くいる大きな学校だったので、毛布などは2人で1枚しか使えなかったのですが皆で協力して、その日を乗り越えました。

次にヒューマンエラーについて話したいと思います。三陸大津波の被害は、100年前の人々が地元の人たちに警告し続けていたにも関わらず、繰り返してしまった出来事です。昔の人はすでに100年前から、石碑という媒体を使い現代人に警告してくれていたのです。しかし、人間なら、誰しも、いつでも、どこでも、どんな場合でもヒューマンエラーを引き起こしてしまう場合があります。今日の人間の技術で自然に打ち勝つことは不可能なのです。この事は、今回の東日本大震災で証明されました。例を述べると岩手県宮古市の防潮堤はギネスブックにも掲載された高さ10mの日本一の規模を誇るものでしたが、今回の大津波で大破しました。結果として、自然の力に対して人間の技術力は気休めだったのです。100年前の人々は地元に住生活する人に対して石碑という物理的に風化しにくい媒体を使って「ここから先に家を建てるな」とはっきり言うてくれていたのです。しかし、何十年もの時間を経て人間の経験や失敗を伝承するには、多くの課題があることを改めて感じます。その地域でどんなに多くの人々が亡くなっても一世代が入れ替わる年月が経つと誰もが忘れてしまうのです。風化する前に将来に向けて、気持ちが傷ついたことをバネにして将来を考え、アクションを前向きに転換することは出来るのです。同じ過ちを繰り返さないように、自分自身の欲や利益を優先しないで大事な判断を誤っていないかというチェック意識の重要性を感じることを心に留めることが大切だと思います。

インスパイア・ジャパン2012に参加して

石巻第6団ベンチャー隊 内海 里沙

私は、9月15日～17日にかけて、愛知県で行われた『インスパイア・ジャパン2012』というプログラムに参加しました。その中で心に残ったことは3つあります。

1つ目は、カヌー体験です。カヌーは初めてではなかったのですが、上手く漕げるか不安でした。しかし、思ったより上手く漕ぐことができました。最後の方は雨が降ってしまいましたが、とても楽しかったです。

2つ目は、震災に関するワークショップです。私は宮城県代表として、みんなの前で震災について発表しました。とても緊張しましたが、自分なりに精一杯発表することができて良かったです。

3つ目は、文化交流会です。今回、ウクライナやマケドニアなど、自分があまり知らない国が参加していたので、初めて見聞きするもの・ことが多くて、とても新鮮でした。また、日本の文化にとても興味を持ってくれ、何より大いに盛り上がったのでとても楽しかったです。

今回のプログラムで私は、普通じゃできない体験をして、また多くのことを学びました。なので今後それを生かしていけたらいいなと思います。



もう会うことはないかもしれないけど、これからの未来を作っていくのは私達で、みんなどこかで頑張って、将来また私達が描いた、理想の未来で会えたら、カッコいいと思います！そのため、参加して終わりにしてしまうのではなく、今回のこの貴重な経験を日常生活、ボーイスカウト活動にいかしていきたいと思います。



ありがとうございました。



4HTCを振り返り16NJに生かそう！

宮城県連盟派遣団本部 横澤 繁



8月2日、蔵王坊高原で宮城県連盟派遣団の解団式を行い、参加隊を見送り、県連倉庫に資材を格納し、自宅に戻って久々の風呂に全身を沈めると、参加者全員が4HTCを楽しみ、成長して無事に戻れたことに感謝の気持ちが湧いてきました。これも山形県連盟のスタッフの皆様のご活躍のお陰とさらに感謝の気持ちが強くなりました。

大会期間が4日間全て平日のみであったことは、指導者にとっては大変だったと思いますが、結果的には野営場には他の団体が入り込まず、スカウトにとっては大変良い環境であったと思います。

また、配給が当初説明されていたような小分けではなく、派遣団一括の配給で不評であったが、このようになったのも我が県連が予定申込や確定申込の報告を遅延したことも一因になっているのではないかと反省しております。シャワーの設備が無いことに心配して県連派遣団本部では女子スカウトと女子指導者に1人当たり3本の使い捨て濡れタオルを支給したが、下界よりも気温が低かったこともありあまり利用されなかったのではないかと考えております。

「希望のともしび」や「希望の黄色いハンカチ」の必修プログラム、アリーナでの各道・県連盟提供プログラム等にスカウトが生き生きと挑戦する姿をみることが出来、大会参加までの準備の疲れも飛んでしまいました。ベンチャースカウト奉仕隊が中心となったプロジェクト活動の高機能設備を搭載した号外車を活用したキャンポリーニュースの毎日の発行には感動しました。このような大会運営が出来た事は、メディア関連企業や地元有力企業を取り込んでの大会運営を図ったことが一因と感じられました。

北九州市のベンチャー隊が奉仕隊として参加していた事は、数か月前に被災地のガレキ受け入れを審議している北九州市議会の模様を伝えるテレビニュースで、傍聴席で受け入れを反対し気遣い染みた叫び声を上げる女性の姿をみて、被災地の現状を良く理解していないことに悲しい思いをした後でしたので特に感激しました。また、ベンチャー隊長と夜の懇親の場で16NJ会場のきらら浜の夏の気候状況等の情報を得ることが出来たことも良かったです。

4HTCでの県連各参加隊の活動状況を見てみると16NJ派遣への課題も見えてきました。スカウトの面では体力増強と暑さ対策である。特に今大会では熱中症で入院したり、蔵王登山で、途中でリタイヤしたスカウトが出たことなどである。指導者の面ではチャイルドプロテクションの取り組みである。特にキャンプサイト内での活動中にスカウトの前で喫煙をする指導者が沢山見られ、これを指導者同士で注意し合っていないことである。また、キャンプサイトで隊長等が大声で怒鳴っているのが見られたことは改善の必要性を強く感じました。今後、さらに4HTCでの県連派遣団の活動を振り返り、4HTCでの経験を16NJ派遣に生かして行きたいと考えております。

第10回カトリックスカウトキャンポリーに参加して

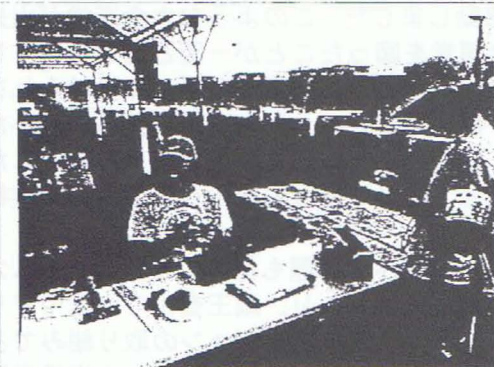
仙台第37団ボーイ隊 高橋 直人

8月2日(木)～6日(月)、富山県立山で第10回カトリックスカウトキャンポリーが開催され、その大会に参加しました。初日の荷物搬入が、最も苦労したと感じています。その中で、下り坂で重い荷物を持って移動し大股で歩いた結果、足に大きな負担がかかったことを改めて知りました。交流会が印象に残っているプログラムで、他県とのスカウトと直に話を出来る場で、友情の輪を広げていると感じました。登山をするプログラムもあり、このプログラムは最初にゴンドラに乗り、山の途中から登山を始めて頂上で昼食を食べてから下山するという流れになっています。このプログラムの下山している最中、腹痛に襲われて大変な思いをしました。キャンプ中の食事は、豊富なメニューがあり、食事を食べるのも、作ることも楽しく出来ました。食事を作るのに最も苦労したのは焼きそばを作ることでした。なぜなら、焼きそばを焼くための鉄板が、焼きそばの具材の量に対して小さいから具材がこぼれ落ちてしまうからです。それに作り終えた後の鉄板を洗う作業も苦労しました。しかし苦労したため、食事は美味しく食べられました。最終日の早朝に雷が鳴り、今にも雨が降りそうだったので起きて片付けをして寝る時間が余りなくて疲れましたが、バスの中で『ぐっすり』寝ました。

第11回日本アグーナリーに参加し

活動サービスセンター「クラフト」 大久保 晃男（県連理事）

日本アグーナリーは当初障害児スカウティング委員会が中心となって開催され、有志による大会となっておりましたが、第10回より日本連盟の主催行事となって4年置きに開催され、今年滋賀県希望が丘文化公園で8月2日から6日まで第11回日本アグーナリーが開かれました。アグーナリーには第6回の代々木から関わり、レザークラフトのプログラムを提供してきました。クラフトには私を含めて5人のスタッフとチャレンジクルーのベンチャースカウト2名が奉仕されました。クラフトは「革のチーフリング作り」を行い、丸型の革に大会マークをプレスかけ、私のテーブルでスカウトの名前を革用の特殊なナイフを使って数秒で入れ、染料で色を染め、仕上げをして制作いたします。3日からプログラムが開始しクラフトには多くのスカウトが押しかけ、予定の数80を越え、午前中の一時間で120を超えてしまい、4日の場外プログラムの数で調整することになりました。クラフトには参加スカウト、リーダー、スタッフのチーフリング作りの他に見学者向けに簡単に作れる「レザーネームタッグ作り」のコーナーを設け、見学者もクラフトコーナーに参加できるようにしました。5日は朝からぴりぴり、写真は夕方まで禁止令が出ておりました。秋篠宮殿下家族がクラフトのブースに来られ、殿下はチーフリングにプレスをかけられ、私のところに来てチーフリングに名前をカットで『Fumihito』と入れもって行かれました。後に日本連盟事務局長が殿下からの託ですとチーフリングの完成を依頼され、緑で染め仕立て仕上げをしてお渡しました。6日に閉会式が行なわれ無事に終了することが出来ました。また会場でベーデン・パウエル卿の孫「マイケル」ご夫妻とお会いし、アグーナリーの後宮城県に来県することになっていたの、宮城県でまたお会いすることを約束して別れました。アグーナリーニュースの最終号のページにMr. Tが取り上げられていましたので掲載し報告と致します。



革細工のプロ Mr. Tこと大久保晃男さん（彼は頭の回転が速く）はユニークなトークで、笑顔にさせてくれる。

彼はプロでもあるが、「みんなの喜ぶ顔を見ると楽しいから」と革細工を続けている。

彼は頭の中で一人一人のサインをイメージするセンスと、数秒のうちに彫るスピードを持っている。

私たち奉仕記者もチーフリングに名前を彫ってもらい、たった一つの宝物ができた。

5日奉仕記者のクルー
藤敷 彩（神戸55団）
佐野 萌子（三田1団）
宇田 佑一（横浜30団）

第10回カトリックスカウトキャンポリーに参加して

仙台第37団ボーイ隊 守 泰平

他県のボーイスカウトと友好を深めることと野営の技術習得のため、8月2日～6日富山県立山にて開催された第10回カトリックスカウトキャンポリーに参加しました。2日（木）

4：30東仙台カトリック教会に参加スカウトが集合しました。荷物を大型バスに入れ、教会でおいのりをし、5：00に教会を出発しました。朝が早かったので、バスの中では眠っており、目が覚めると14：00で館山に到着していました。バスを降りた場所から自分のキャンプサイトまで長い下り坂で、最初荷物を運ぶのが楽だと予測していましたが、荷物を運びながら下り坂を歩くのは足に負担がかかると改めて知りました。3日目のプログラムが印象に残り、そのプログラムは白川郷見学です。TVやインターネット等を通して合掌造りの建物を見たことがありますが、実際にその大きさを見ると、自分の家より大きいと感じました。また、建物の中に入り、農作業に使った道具等見慣れない物があり、どのように使うのだろうと好奇心が沸き、自分でその道具を使う等体験してみたいという気持ちを持ちました。最終日の夜、突然、雷が鳴り、雨が降るかもしれないということで、夜中に荷物整理とテント撤営を行ないました。そのため、十分な睡眠がとれず、帰りのバスの中では、行きと同じく寝ていました。このキャンプを通して、次に行なうことを予測し、行動することがキャンプを安全に進める方法と知りました。今は、その間違えた形の予測になる場合があると思いますが、先輩たちの行動をよく見て、真似をし、自分の力にしていけます。

ボーイスカウト仙台第37団カブ隊長 村越 充

開・閉会式でのセレモニーの中で、3・11の被災地である東北からの参加であると東仙台教会の紹介があり、被災地へのあつい励ましと声援をたくさん頂きました。またベンチャー隊の5名は、私達スカウトの「ちかい」「やくそく」にある「他の人々を助ける」「人に役立つことを心がける」を実践するため、それぞれが目標を持ちユースセンターでの奉仕活動を楽しんでおこなってきました。

宮城県連盟プログラム委員会 菅野 宏彦

- 9 -

第13回韓国ジャンボリーに参加して

石巻第6団ベンチャー隊 内海 里沙



私にとって第13回韓国ジャンボリーは、2回目の海外派遣ということで、2回目という自信と、いろいろな不安がありました。しかし少しずつ不安は消え、韓国ジャンボリーを大いに楽しむことができました。中でも心に残ったのは、次の3つです。

1つ目は、プログラムで観光をしたことです。韓国語の看板などを見るととてもウキウキしました。さらに、同年代の韓国人の女の子2人と仲良くなり、移動中にたくさんコミュニケーションをとりました。時間ギリギリまで色々な場所に行けて楽しかったです。

2つ目は、インターナショナルナイトです。色々な国のパフォーマンスはとてもかっこよかったし、日本隊でもヘビーローテーションを踊って、とても盛り上がる事ができて良かったです。

3つ目は閉会式です。途中で帰ることになったときは少し残念でしたが、大いに楽しみ盛り上がり、最後にみんなで騒いだりできてとても楽しかったです。

今回の派遣では、たくさんの交流ができ、隊や班のみんなもとても良い人で、優秀班をとることができました。そしてたくさんの事を学んだので、後輩スカウトにそれを伝えていきたいです。

第13回韓国ジャンボリーに参加して

仙台第1団ベンチャー隊 和田 悠佑

こんにちは、ボーイスカウト仙台第1団ベンチャー隊の和田悠佑です。

楽しい夏のプログラムということで、私は、第13回韓国スカウトジャンボリーに参加してきました。

まず、韓国スカウトジャンボリーってなんだと思う人もいると思うので、簡単に説明したいと思います。

8月2日から8月8日までソラクサンにて行われ、規模は15NJより大きかったと感じました。そして韓国スカウト以外にも多くの外国人スカウトがいました。え？そんな話聞いてないぞってスカウトも多いと思います。実際、私の隊でもそのような話は無かったです。では、私はどのようにして参加したのでしょうか。ボーイスカウト日本連盟のホームページにいろいろな大会の募集要項が掲示されています。私はそこで13KJの存在を知り、応募に当たりました。やはり何事も自分からしないと始まりません。

ところで、どのような大会プログラムがあったのか気になる方も多いと思います。私が思い出に残ったプログラムは、場外プログラムです。内容は、市街地を多国籍スカウトの班にてオリエンテーリングをする。私の班の構成は韓国スカウト5人、台湾スカウト2人、日本スカウト3人の10名でした。始めは内輪どうしでしか話をしていませんでしたが、徐々に打ち明けていきました。なかでも話で盛り上がったのはアニメの話でした。

他に、カルチャーデー文化の日があり、その中で駄菓子を無料で配っていました。大好評で直ぐに無くなり、おかげで仕事も直ぐに終わりました。空き時間があつたので、他の国の食事食べてみると、期待通りであり、予想通りの味でした。

キャンプ中にはいろいろとハプニングが多かったのですが、なんとか乗り切ることができました。そして、ちゃっかり優秀班も頂きました。最終日にはソウル市内の観光もありとても充実した一週間でした。

政界では日韓関係はよくありません、しかし、民族や宗教を関係なしに盛り上げられるのはボーイスカウトだけだと改めてボーイスカウトの良さを感じられました。



＝ボーイスカウトに女子も加入＝

イギリスにボーイスカウトが始まったのは、創始者ベーデン・パウエル卿がイギリスの少年たちの将来を考え Scouting for Boys を書き、少年たちの夢と希望を込めて出版しました。

多くの少年少女たちに読まれ、本を基に少年たちの手による活動が始まりました。

当初は、男子も女子も区別なく本に憧れた少年少女たちによりボーイスカウト運動がイギリス全土に広がりました。ベーデン・パウエル卿は紳士淑女の上流階級を考慮して少年と少女の活動を分離して、男の子の活動と女の子による活動と組織を別にし、ボーイスカウトとガールガイドとに分けて活動することになりました。ボーイスカウトの名称は世界各国共通の名称ですが、ガールガイドはヨーロッパを中心にした名称で、アメリカやアジアではガールスカウトと呼ばれています。日本ではガールスカウトと呼ばれ、ボーイスカウトとは連盟が違って活動しています。ガールガイドの初代会長にベーデン・パウエル卿の妹（三女）アグネス女史が成り、ベーデン・パウエルと共同でガールガイドのパンフレットを作成しました。ガールガイドもボーイスカウトと同じように「ちかい」と「おきて」を教育の柱に女性による女性のためのスカウト教育がなされました。時が経ち男女平等の社会になり、ヨーロッパのスカウト運動も逸早くボーイスカウトとガールガイドが合体したスカウト活動を展開するようになりました。1987年カナダのカナナキスで開催された第15回世界ジャンボリーの折、ドイツのキャンプサイトを通った時スカウトが大声を出して話している方を見たら、男性のスカウトと女性のスカウトが一緒にテントから顔を出していました。日本では考えられない光景に驚かされたことを思い出します。ヨーロッパでは男女が一緒にスカウト活動を展開することを研究され、多くの国が活動と一緒にするようになりました。そのためスカウト章もボーイスカウトのユリの花にガールガイドのクローバー（三弁章）を重ねて作られ、男女が合体した活動が展開されております。アメリカでは日本と同じようにガールスカウトとして別に活動していますが、カブスカウトのリーダーとして女性が加わり多くの役職で奉仕されておりました。カナダの帰りにアメリカ連盟のフィルモント野営場に行き、女性のローバースカウトがコースリーダーとして奉仕されているのを見て段々アメリカも女性がボーイスカウト活動に参加するようになっていったと思います。近年のボーイスカウト活動にはベンチャースカウト部門に女性が加わり、世界スカウトジャンボリーや日本で開催される国際行事にアメリカ派遣団の一員として女性のベンチャースカウトが参加しております。日本のボーイスカウトでは大学の中にローバースカウトがサークル活動としてローバー活動に入り、女子学生がローバースカウトとして参加、全国大会などで奉仕される姿を見ることが出来ました。日本のボーイスカウトもガールスカウトとの合併を考え、ヨーロッパのスカウト活動を研究し提案しましたが合併とはならず、それぞれの組織で活動されることになりました。その後、ボーイスカウトの大会にガールスカウトも参加できるようになり、大会プログラムも一緒にやることになりました。オランダの世界ジャンボリーにボーイに混じってガールスカウトが一名派遣されました。日本連盟ではヨーロッパのスカウト活動を研究し、ガールスカウトとは別に女の子もボーイスカウト活動に参加できるように研究を重ね、長い年月をかけて審議されました。日本連盟に女の子も加入することが認められビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャーの各部門に男の子に混じって女の子がボーイスカウト活動に参加できるようになりました。女子加入になって19回世界スカウトジャンボリー（チリ）に日本からただ一人の女子スカウトが男の子に混じって参加いたしました。その初めて派遣されたスカウトは宮城県連盟（石巻地区）から派遣された女子スカウトでした。女子スカウトの海外派遣への道を開くことに成り、その後の世界スカウトジャンボリーや国際行事に多くの女子スカウトが男子スカウトに混じって派遣され、国際交流を果たすようになりました。

石巻第6団に3人目のチャレンジ章完修

加藤みどりカブ隊長指導のもと昨年の大震災にも負けずがんばって挑戦した只野怜君のコメントです。

石巻第6団組織拡張広報副委員長 榛澤 達夫



遊びと冒険がいっぱいのビーバー隊からカブ隊へ上進した時、たすきにいっぱいワッペンをつけているカブ隊先ぱいを見て、とてもかっこいいと思いました。

それからタスキを目標にして、カブブックとチャレンジブックをがんばりました。ワッペンがどんどん増えていくと、とても楽しくてやる気が出ました。

いちばん楽しかったのは、巣箱作りです。とんかちでくぎを打つのがおもしろかったです。みんなで手伝いながら力を合わせて作りました。大変だったのは、「気象学者」など、毎日続けて記録をつけていくものです。とちゅうでやめてしまって、また最初からやり直したものもありました。チャレンジ章を全てクリアした時、嬉しい気持ちと達成感を感じました。ぼくは8月でカブ隊を卒業しますが、後はいのスカウト達もがんばってカブのチャレンジブックにちょう戦し、ワッペンをも多く取ってもらいたいです。石巻第6団 カブ隊 只野 怜

宮城県連盟「きずなウォーキング」コンテスト中間報告のお知らせ

県連盟プログラム委員会

現在ボーイスカウト日本連盟でおこなっている「全国のスカウトみんなが、つなぎ合わせて90万キロを歩こう！」に併せて、宮城県連盟独自に各隊毎の歩行コンテストを開催しております。

現時点での中間報告です。来年3月までの1年間で、どこまで歩くことができるか各隊で挑戦してみてください。来年3月までの総歩行距離で、各隊毎に第1位～第3位を来年の県連総会で表彰致します。

■4月～10月累計順位(10月10日現在)

- ・ビーバー部門: 第1位 仙台第12団
- ・カブ部門: 第1位 塩釜第3団
- ・ボーイ部門: 第1位 塩釜第3団
- ・ベンチャー部門: 第1位 塩釜第3団

(所定の「歩行距離報告書」に記入し、毎月5日まで県連事務所に報告して下さい。)

PEACE RUN (ピースラン)から義援金

ランニング用バギー(ベビーカー)に荷物を積んで、化石燃料を消費しない地球環境に配慮した旅をしている高橋勝彦氏。北米大陸を横断し、日本縦断途中、宮城に立ち寄り7月14日、県庁前にて被災したボーイスカウト宮城県連盟に対して義援金をいただきました。

(高橋氏から、県連理事柿沼氏に手渡されました。)



編集後記

地域社会に奉仕する機会が多い季節です。スカウトのユニフォームはスカウトしか着られません。スカウトとして胸を張って、プライドを持って地域社会で着てください。ユニフォームの胸には世界スカウト章が着いています。世界スカウト機構の一員の印です。もっと誇りを持ってユニフォームを着用しましょう。(大久保 記)

- 発行 日本ボーイスカウト宮城県連盟
- 編集 宮城県連盟組織拡張広報委員会
- 委員長 大久保 晃男
- 副委員長 柿沼 富雄
- 委員 幸田 行広 大沼 茂雄
- 松本 康男 蟻坂 隆
- 小野寺 純

〒985-0841

宮城県多賀城市鶴ヶ谷1丁目4番1号

宮城県多賀城分庁舎内

TEL 022-355-6265/FAX 022-355-6267